HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高見敏子先生業績と近年の活動一覧/高見敏子さん業績一覧等の作成を終えて
Author(s)	土田, 映子
Citation	The Northern Review, 39, 53-59
Issue Date	2019-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76181
Type	other
File Information	NR39_4_tsuchida.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

高見敏子先生業績と近年の活動一覧

作成：土　田　映　子

【注記】

高見先生の業績一覧作成にあたっては、以下のソースを参照して把握できた範囲で情報を収集しました。完全なリストではないことにご留意ください。学術論文とその他の著作の区別はせず、一律に年代順に記載しています。また、高見先生の近年の諸活動についても (3) の資料よりまとめてあります。

レファレンス一覧

(1) 石川慎一郎・石川有香・後藤一章・田中省作・田畑智司・中尾桂子 (2019)「言語研究と言語教育に統計をどう活かすか―高見敏子氏の研究から考える―」『統計数理研究所共同研究リポート 414 言語特性の量化によるテキストの探索的・検証的分析』169–182.
(2) 北海道大学学術成果コレクション HUSCAP (https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/index.jsp)
(3) 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院事務部総務係に高見先生から提出された「業績等自己申告票」2015 年 12 月・2016 年 5 月・2016 年 12 月・2017 年 6 月・2017 年 12 月・2018 年 6 月分
(4) researchmap (https://researchmap.jp/)
(5) Google Scholar (https://scholar.google.co.jp/)

【業績一覧】

高見敏子 (1996)「イギリスの高級紙と大衆紙―語彙の基礎的観察」『英語コーパス研究』3, 95–104.
高見敏子 (2003)「『高級紙語』と『大衆紙語』の corpus-driven な特定法」『大学院国際広報メディア研究科言語文化部紀要』（北海道大学）44, 73–105.
高見敏子 (2004a)「ソフトウエア紹介　Simple Concordance Program」『英語コーパス研究』11, 199–213.

高見敏子 (2004b)「特徴語の特定法―英・米・豪の新聞英語における語彙比較への応用」*The Northern Review* (北海道大学) 32, 31–66.
細川敏幸・小笠原正明・西森敏之・岡部成玄・野坂政司・安住和久・高野伸栄・渡邊智・高見敏子・伊藤直哉・川村武 (2004)「e-Learning を大学教育にどう展開するか：e-Learning 研究会報告」『高等教育ジャーナル』(北海道大学高等教育機能開発総合センター)12, 173–182.
Takami, S. (2004). A Corpus-driven identification of distinctive words: 'Tabloid adjectives' and 'broadsheet adjectives' in the Bank of English. J. Nakamura, N. Inoue, & T. Tabata (Eds.), *English corpora under Japanese eyes*, 115–135. Amsterdam, Rodopi.
園田勝英・高見敏子 (2005)「6 章：コーパスに基づく語彙研究」齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎 (編)『英語コーパス言語学（改訂新版）』121–143. 研究社 .
高見敏子 (2006a)「コーパスにおける出現頻度の高低と log-likelihood 統計量の関係」『統計数理研究所共同研究リポート』190, 15–24.
高見敏子 (2006b)「使用語彙レベルと総語数による英語多読図書の読みやすさレベルの算出」*The Northern Review* 34, 45–59.
高見敏子 (2007)「英語における POS タグ分布の相関性：LOB コーパスを例に」『統計数理研究所共同研究リポート』199, 89–99.
高見敏子・原田真見 (2007)「英語多読教材図書：『100 万語多読』の薦め」『北海道大学附属図書館報：楡蔭』126, 3–4.
高見敏子 (2008)「統計的指標を用いて抽出した特徴語の妥当性の検証例：特徴語による英語の高級紙と大衆紙のテキスト判別の試み」『統計数理研究所共同研究リポート』215, 83–96.
高見敏子 (2009a)「言語データと統計的検定に関する疑問―統計学の入門書でわからないこと」『統計数理研究所共同研究リポート』232, 1–10.
高見敏子 (2009b)「語彙頻度と統計的手法：英国二大政党のマニフェストにみる特徴語」英語コーパス学会第 33 回大会シンポジウム「コーパスと統計で解き明かすポリティカルディスコース」発表資料 (2009 年 4 月 25 日、神戸大学).
高見敏子 (2010)「カイ二乗検定の手順」石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠（編）『言語研究のための統計入門』70–76; 本書添付 CD-ROM 収録「カイ二乗検定用 ExceI ファイル」. くろしお出版 .
高見敏子 (2012)「Bank of English と British National Corpus における英国全国紙の POS タグ分布」*The Northern Review* 38, 41–69. ※英語学論説資料第 47 号第 5 分冊に転載 .
高見敏子 (2016a)「計量的語彙研究におけるピアソンの積率相関係数利用の問題点：コーパスデータによる松尾 (1982) の指摘の検証」石川有香ほか (編)『言語研究と量的アプローチ』116–129. 金星堂 .

高見敏子 (2016b)「BNC に見る英国の大衆紙と高級紙の形容詞」堀正広（編）『英語コーパス研究シリーズ第 5 巻：コーパスと英語文体』187–218. ひつじ書房 .

高見敏子 (2017)「14 章：新聞・雑誌のスタイル」豊田昌倫・堀正広・今林修（編著）『英語のスタイル―教えるための文体論入門』166–177. 研究社 .

高見敏子 (2018)「[北大は新入生を歓迎する]：先生からのメッセージ」『リテラポプリ』（北海道大学）44, 14.

高見敏子･浜井祐三子 (2018)「北海道大学における英語多読多聴学習の 12 年の歩み」『外国語教育センター報告書　外国語教育における ICT 活用／自律的教育活動の発展』（北海道大学）3–23.

【2015 ～ 2018 年の諸活動】

学会発表

高見敏子「松尾 (1982) の指摘の検証―語彙の類似度とピアソンの積率相関係数―」統計数理研究所・言語系共同研究グループ公開セミナー「言語研究と統計 2016」(2016 年 3 月 15–16 日)

伊藤孝行・高見敏子「『沖縄こども新聞』とそのことば」沖縄文化協会 2016 年度公開研究発表会 (2016 年 6 月 25 日、名桜大学)

研究院内共同研究

高見敏子（代表）・原田真見・浜井祐三子「北大英語多読多聴授業支援システム Legolis2 の開発と多読多聴学習環境の向上」

伊藤孝行・高見敏子「日本言語史資料としての沖縄地域言語資料の文献整備に関する基礎的研究」

学内・部局内の委員会活動など（順不同）

- 英語Ⅱ CALL 実施委員会委員長（2014 年 10 月～ 2015 年 9 月）
- 英語系委員（2017 年 4 月～ 2018 年 3 月）
- 北海道大学図書館委員会
- 北図書館委員会
- 高等教育推進機構運営委員会入学者選抜研究専門委員会
- 成果公開委員会
- 学生委員会
- 外国語 CALL 専門委員会

- 外国語教育企画専門委員会
- 外国語将来構想ワーキンググループ
- 英語プログラム企画専門委員会
- 留学支援英語・CEPU ワーキンググループ
- 北海道大学英語英米文学研究会幹事
- 「眞﨑睦子先生を偲ぶ会」企画担当
- 新渡戸カレッジ応援企画「英語多読マラソン」協力教員（「英語多読マラソンスタートアップガイダンス」講師、ガイダンス資料作成、新着多読教材の語数調査およびレベル情報作成とデータ提供、教材一覧資料作成、ラベル作成用ファイルの提供ほか）

以上

高見敏子さん業績一覧等の作成を終えて

土 田 映 子

高見さん自身が作成した記録から近年の諸活動を列挙する作業をする中で、その多様さと量に改めて考え込まずにはいられなかった。特に、2017 年度に英語系委員（英語科目運営の実務を科目責任者とともに担当し、翌年度の英語の時間割作成を行う）の重責を担い、任期終了とほぼ同時に入院となった事実は、その業務がなければ違う結果になったのかどうか、という答えのない疑問を呼び起こす。思い返せば、系委員から英語教員への毎年ルーティンで行われる諸連絡が、2017 年の夏以降は遅れがちになっており、高見さんからのメールにお詫びの文言を目にすることが時々あった。高見さんが仕事を熱心に、細部まで丁寧にやろうとするあまり時間がかかってしまうことが珍しくないのを知っていたために、またそういう状態になっているのだろうと思っていた。しかし、一方で責任感の強い彼女にしては「らしくない」状態でもあった。それが忙しさ以外の要因によるものだと、病の一報を聞くまで気が付かなかったのだ。

彼女と知り合う機会を得た人の多くは、研究や大学業務は彼女の豊かな活動の、大半ではあっても全部ではないことを知っている。それは彼女が、世の中に存在するもろもろの人間活動に関心を持ち、自ら関わっていこうとする積極性の現れだった。高見さんが密度の濃い年月を生きた、ということは、レファレンスの冒頭に挙げた統計数理研究所の追悼論文で整理された高見さんの研究活動の意義からも、また写真に記録された余暇活動の様子からも伺える。仮に、健康のために仕事やその他の活動の量を減らし、もっと休むべきだという意見があり、それに従ったとして、高見さんがより幸せになったかどうかはわからない。さまざまな活動をすること、その一つ一つに真摯にエネルギーを投入すること、それは高見さんという個性の生のあり方そのものだったからだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2018 年の 5 月か、6 月であったか、高見さんがピンク色の箱を持ってわたしの研究室にやってきた。箱には「ファンシーはたおりき」と商品名が印刷されてあり、プラスチックの枠に毛糸を縦横に張って幅 15 センチ・長さ 30 センチの布が手織りで

きるという手芸道具で、新品だった。
「自分で使おうと思って買ったんだけど、使わなかったから」
　我が家の娘に、譲ってくれるという。
　娘が小学 1 年生だった 2016 年のクリスマス、同僚の浜井祐三子さん、原田真見さんと一緒に、自宅でのクリスマスパーティーに来てくれた。その時にも、娘へのプレゼントとしてテグスにビーズを通してネックレスなどを作るキットを持ってきてくれたのだった。
　ありがとう、と言って箱を受け取り、その後の言葉に詰まった。高見さんの行動が何を意味しているのか、彼女の手術後に同僚たちと見舞に行った際、本人が病状について語った内容から察しがついていた。励ましの言葉の場面でないことは明らかだった。
　高見さんの顔を見るばかりのわたしに、彼女は何ともいえない表情で、無言のまま手を振った。

　大学で高見さんに会ったのはその後、もう一度ある。7 月 11 日の午後 6 時過ぎだった。日時がわかるのは、英語Ⅱ科目の担当教員グループにより、ティーチング・アシスタントの学生たちに日頃の感謝を伝えるための夕食会が企画されていた日だからである。わたしたちのグループは出かける途中で高見さんと廊下で出会った。高見さんは別の教員と立ち話をし、わたしは科目の代表者だったため、開始時刻が迫るのを気にしていた。高見さんの靴がとても大きく見え、履き口から細い両足首が出ていたことを憶えている。やっと皆が動き出した時、わたしは高見さんを振り返って面白顔を作ってみせた。薄暗い廊下で、彼女の反応はよく見えなかった。それが明瞭な意識のある彼女と顔を合わせた最後になった。

　高見さんとは同じ大学院（東京大学大学院総合文化研究科）の出身で、在学時期も重なっているが、知り合ったのは 2002 年 4 月に北海道大学言語文化部（当時）に就職してからのことである。同じく総合文化研究科の元同僚で、先に北大に赴任していた浜井さんが在外研究に出ていた時期で、高見さんが北大初年度のわたしの実質的なメンターとなった。
　2004 年 11 月に奈井江町で行われた北海道大学教育ワークショップ（当時の高等教育機能開発総合センター主催。2005 年発行の『高等教育ジャーナル』に報告書が掲載されている）に、部局から 2 名参加者を出すことになり、高見さんとわたしが行った。温泉のついた宿泊所での研修で、わたしたち 2 人は修学旅行生のようにはしゃぎっぱなしだった。一般的には、青春というのは範囲を広く取っても中学から大学生までの期間を指すものだろうけれども、あの時の高見さんとわたしは間違いなく「青春」していた。言いたいことを何でもばんばん言って、他の参加者をへきえきさせていたのではないだろうか。あの時なぜあんなに高揚していたのかは今もってわからないが、

高見さんとの特別な思い出になったことは確かである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フランシス・スコット・フィッツジェラルドの小説「グレート・ギャツビー」の終盤に、「友情とは相手が生きているあいだに発揮するものであって、死んでからじゃ遅いんだということを、お互いに学びましょうや」（村上春樹訳）という台詞が出てくる。この業績一覧等をまとめたことは、だから友情の証としては手遅れということになる。専門も異なり、もっとも近くにいたわけでもない自分が作業をして、追悼号にふさわしい完成度になったかどうかは心もとない。作業の結果に意義があるとしたら、高見さんはこのように生きたということを示すあまたの記憶や記録の一部について、ただ容赦なく過ぎていく時間の中に散逸するのを、微力ながら押しとどめようとすることへの貢献だろうか。

本当にごく一部なのだということを再び噛みしめて、この稿を終えたいと思う。